久留米信愛短期大学研究紀要，第45号，55¯62（2022）
KURUME SHIN-AI COLLEGE BULLETIN，　No.45 55¯62(2022)

保育者養成校における実習並びに保育・教職実践演習の授業改善の一考察
～当事者意識を育成する科目間連携を通して～

桑原広治・森久美子

A study on class improvement for practical training and practical exercises for childcare and teaching profession at training schools for nursery-school teachers
-Through inter-subject collaboration to foster a sense of ownership-

KUWAHARA Hiroharu and MORI Kumiko

Abstract
At many training schools for nursery-school teachers (schools that train both kindergarten teachers and nursery school teachers), a class with the name of “Childcare/Practical Seminar for Teaching Profession (Kindergarten)" is offered. In addition, in Attachment 1 of "Future Existence of Teacher Training and Certificate System”, it is stated that “Practical Seminar for Teaching Profession is positioned as a “compilation of learning progressions”.” In other words, it is a “overall summary” of the classes at training schools for nursery-school teachers. We have been working on class improvement through inter-subject collaboration involving subjects that the authors manage (Constitution of Japan, language expression, human relations, childcare principles, etc.), in addition to reconfirming the qualifications and abilities required for childcare workers.

Key words: output, sense of ownership, inter-subject collaboration, compilation of learning progressions, group work

キーワード：　アウトプット、当事者意識、科目間連携、学びの軌跡の集大成、グループワーク

11 問題の所在と研究の目的

筆者は実習先訪問に力を入れる。アポを取る時に「設定保育等」、可能な限り、学生がひとりで何かに取り組む機会に訪問させていただく。学生の入学時のスタートラインは皆違う。社会人であればキャリアも違う。その学生たちが一堂に教室で学ぶ。「学び合う教室の風土」を醸成していけば最高の学びの場になっていく。実習先訪問で厳しい指摘を受けることがある。学生の姿は教員の指導の裏返しである。教員の目的意識と授業の振り返り（何を学び、何が分かって、何が難しかったか）につないでいく。

経験知の少ない学生に保育原理等の各教科を身近なものとして理解してもらうには、「短期大学と現場の乖離」を限りなく近づけることが重要である。教員には、２年間という短い期間に「大学と現場をどうつなぐか」を教材研究のベースにおかねばならない。2 年後は、短期大学の卒業生だけでなく、専門学校、４年生大学など様々なキャリアを積んだ卒業生が同じスタートラインに立つ。まず、教員は４年生大学との違いを念頭に置きながら、短期大学の保育者養成を考える必要がある。ともに、「基礎学力」「社会人基礎力」「専門知識」の育まれる比重が異なることにある。つまり、４年生大学は、「基礎学力」「社会人基礎力」「専門知識」を４年間かけて取り組むことができる。しかし、短期大学は、２年間で専門知識が中心のカリキュラムで実践力を同時に育むことが求められる。

社会人基礎力（社会で必要な能力、基礎力）の議論の背景は、「近年、職場などで求められる能力には、基礎学力や専門知識といった数値化でき、測定しやすいもののほか、コミュニケーション能力や実行力、積極性といった数値化しづらい、測定しにくいものがあり、採用の際にもこれらがより重視される傾向にある。これらの能力は、従来、家庭や地域社会の中で自然に身に付けられるものと考えられていた。しかし、現代社会における家庭の教育力の低下や地域コミュニティの希薄化により、自然に身に付けることがままならない環境となっている。そこで、学校教育に対しても、基礎学力や専門能力だけでなく、これら社会において必要となる基礎的能力の育成について期待が寄せられている。しかし『若者が社会に出るまでに身に付ける能力』とは未だに十分にマッチしていない。」と述べている。

多田は「近年本学保育科の学生は学力と意欲の両面において格差がみられる。課題の意図を汲み取れずに適当に済ませる、保育者としての想像力に乏しい、みずから学びのサイクルを実施できないなどの学生も目立っていた。こういった学生は、これまでの学習生活の中で、みずから学ぶという経験や努力をして何かを達成した経験が少なかったのではないだろうか。もう一歩踏み込んで言えば、そうならざるを得ない現状が学生たちの環境にあったとも言えるのかもしれない。もしそうであるなら、この学生たちは、教員側から適切な学びの環境やしかけを提供できれば、むしろ伸び代が大きく、可能性の高い学生たちであると言えるだろう。」（１）と述べている。

本研究は、入学した学生のスタートラインを踏まえて学生理解に努め、筆者が主に担当する他の科目等（保育原理、言語表現、人間関係、日本国憲法等）の「科目間連携」と「逆向き学習法」で「考える力」を２年トータルで醸成する授業実践である。よって、各科目の授業では、関連する内容は一人ひとりの学生に寄り添う「授業改善」を図りながら「繰り返す」ことになる。

毎回の授業での振り返りを自分の言葉で考察する学びを通じて学生が成長し、変わっていく様子は説得力があるのではないか。学生にとっても、保育者になったときも、「社会と自分の仕事」とのつながりを実感し、何かを判断する時の基準になっていくことが理解できよう。

あらかじめ、保育原理の専門的な手続きを経た研究ではないこと、数量的な分析を用いた研究ではないことを断っておく。

２　研究の方法

（１）　対象及び方法

２年次後期開講の卒業必修、科目「保育・教職実践演習」

受講生　Ａクラス、女子２０名・Ｂクラス、女子 20 名

１５回の講義とともに、筆者の担当科目（日本国憲法、言語表現、人間関係）を科目間連携の観点で授業を展開する。

学生は、授業の「振り返り」を自分の言葉で「考察」できる力をめざす。さらに、授業では、「考察の共有化」をスライド化し、学生個々の「考える力」を高めるための授業改善の研究を進めていく。

なお、授業の「振り返り」は、前半がシートで、後半は「チャットメール」で提出する。

（２）　倫理的配慮

本研究の性質上、学生の授業の振り返りを取り上げる。その際、学生には、氏名なしで情報を共有し、学習する視点から研究参加の同意を得ている。

（３）当事者意識と「つなぐ力」を意識した授業実践

授業の到達目標を目指して授業改善を行う。授業改善にあたっては、科目間連携と逆向き学習法で授業を進める。

逆向き学習法とは、学生が入学し、２年後に保育現場に就職する４月を想定し、必要となる資質能力に優先順位をつけ、学生の実態との相関を考えて授業展開していくものである。

学生によっては、同じことを繰り返していると思わせない「関連」の具体的視点の解説や、授業展開が重要である。なお、逆向き学習を進めるにあたって、個人差に対応するために「２年

間トータル」で指導する。

（４）受講する学生に伝えること

本授業の受講にあたって、短大でのこれまでの学生生活を振り返り、保育者になるために何が課題であるのか、当事者意識を持ち、一人ひとりが「問い」を持ち、不足している知識や技術等を自覚する姿勢が求められる。グループワークやポスター発表などを通して、主体的に授業への参加とともに、保育者生活をより円滑にスタートできるように社会人基礎力を身に付けていきたい。毎回の授業での振り返りを自分の言葉で考察する学びを通じて学生が成長し、変わっていく様子は説得力があるのではないか。学生にとっても「人間関係と自分の仕事」とのつながりを実感し、何かを判断する時の基準になっていくことが理解できよう。

なお、科目間連携の視点から、授業の始めに日本国憲法の基本的人権（第１１条）について取り扱う。なぜなら、基本的人権には「生存権や表現の自由などいろいろな権利」が含まれており、保育者として子どもが尊重されているかを常に意識して自らを問い返し、学んでほしいからである。また、「生存権」（第２５条）では、「子どもにとって『健康で文化的な最低限度の生活』」とは何かを意識して、子どもや保護者の生活に目を向けてほしい。そして、１５回を通して、人権をベースに置いた保育・教職実践演習の授業を展開する。

そこで、学生が主体的かつ積極的に学び、アウトプットできる専門性を育てるには、どのような授業展開が効果的であるかを具体化して取り組み、その効果を考察して次年度以降の授業にいかしていきたいと考えた。

３　研究の実際

（１）　学生理解のための現状把握

学生の２年次のスタートラインはみな違うという観点から「自己覚知」と逆向き学習法でスタートする。

「自己覚知」とは社会福祉の中で主に使われる。しかし、自己覚知は関係の中で生きるすべての人に求められる姿勢であると考えている。よって、学生は、自分が見聞きしたこと、触れたこと、体験したことから感じる自分の受け止め方や反応の仕方で自己を認識することが大切である。

ある１年生の学生は「10 日間の保育実習を終えて、園でクラスターが発生し、３日間実習に行ったあと延期になったり、予想外なことが起きてとても大変だった。私が一番きつかったことは毎日の日誌だった。自分が思っていることをどのようにまとめたらいいのかなどとても難しかった。最初は子どもの様子や保育者の関わり、言葉掛けを上手く発見できずなかなか日誌が進まず悩む日々だった。しかし、『指導担当の保育者からの毎日の訂正や保育者のアドバイスを受けて、子どもとたくさん遊んでみると沢山発見できるよ。』のアドバイスどおり、目を向けるところが最初に比べると多くなったと思う。私の実習園は小規模だったこともあり、一人ひとりの性格も大体分かるようになったし、〇〇先生と言われるようになりとても嬉しかった。」と振り返りで考察している。

逆向き学習法とは、学生が入学し、２年後に保育現場に就職する４月を想定し、必要となる資質能力に優先順位をつけ、学生の実態との相関を考えて授業展開していくものである。

この学生の考察からも言えるが、観察力、コミュニケーション力、文章表現力、アウトプット力など、個人差が大きいことは明らかである。このような意味においても、逆向き学習を進めるにあたっては、個人差に対応するために個々人の現状の能力を「２年間をトータルで指導する」ことを念頭におく必要がある。合わせて、全教員の情報の「共有」がなくては現場で通用する学生は育たない。

授業を進めるにあたっては、筆者が担当する科目（日本国憲法、言語表現、人間関係、保育教職実践演習等）は、すべて科目間連携の視点から授業の基本的な流れは同じである。

特に重視していることは当事者意識を高める努力を求めたことである。教員、指導者、先輩などがフィードバックした場合でも、自分の問題（当事者意識）としてとらえられないと改善にはつながらない。園などに就職したら保育者として完成しているわけではなく、常に振り返

りながら保育者としての成長を目指さないといけない。就職できて働いているから保育者として十分に完成した先生だというのは勘違いなのである。卒業後は、大学教育の場から離れてしまった卒業生の自己責任であるが、卒業した後でも振り返る力を持っている人材を育てるという教育が大切なのである。

（1）　逆向き学習の観点と学生の当事者意識の向上

経験知が足りない学生は、教科書や教師の話を聞くだけでは、なかなかイメージできるものではない。専門性を学ぶにあたっても現場ではどういう意味があるのかをイメージする具体例が必要であろう。各自がイメージして自ら自己覚知することで何が不足しているかを判断する材料になろう。

当事者意識とは、自分が関わる仕事や物事を「自分の事」ととらえて取り組む姿勢を指す。任された仕事に対して他人事や「やらされている」と思い、ただ言われたことだけをやる「指示待ち」の人は当事者意識が低い人と言われる。一方、当事者意識が高い人とは、仕事に対して「自分の事である」と主体性や高い責任感を持ち、最後まで取り組める人のことである。
例えば、面と向かって「あなたは挨拶ができてないよ」「あなたの声は聞こえないよ」などと指摘されることはまずない。あなたは、「さわやかな挨拶を心掛けていますか？」「挨拶だけは心掛けたほうがいいですよ。」と言われたに響かなければ「挨拶の大切さ」には気づかない。「挨拶に始まって、挨拶に終わる。」も理解できないだろう。２年間で保育者を育てるには、当事者意識を豊かにすることが先決だろう。メールの返信、マナーなども先生になったらだれも指摘してくれない。

犬飼らは「具体的な保育の場では、保育士集団が共通の認識を持ち、連携のとれた機能集団として保育の知識・技術を通じ個々の役割を果たすことが、子どもにとっての人的環境として重要な基盤である。加えて保育者が保育に関する専門的知識・技術を背景として保護者の個別の状況に対応し、受容的・共感的態度で向き合い関わるとともに、必要な情報提供・アドバイス、支持・承認など社会福祉援助の知識・技術を修得することが必要とされる。」（２）と述べている。

日常の授業では、学生に「人は変えられない」と理解させ、自分で気づき、変わるしかないことに気付かせる指導が必要である。授業で講義する課題の一般論を「ひょっとして自分のことでは？」「自分はできているかな？」と当事者意識を高めるのである。

ある園長先生からお手紙をいただいた。
「先生おはようございます。本人にも伝えましたが、文字が小さく、くせのある字もあり、４月からの就職に向けて困るかもしれません。気をつけて書くこと、漢字は少し大きめに書くことを伝えましたところ、最後の方のノートはとても読みやすくなり、御礼のお手紙をいただきましたが、これも丁寧に書いてありとても読みやすかったです。当園は連絡帳アプリを導入しており、Ｉｐａｄでの入力となりますが、まだノートに記入しているところもありますので、４月に就職した園さん次第です。」との内容であった。

当事者意識の解説では、指導担当の先生はどんなところを見ているか。「顔の表情」「声の表情」「体全体の表情」を見ている。学生は当事者意識をもって臨まねばならない。

①社会人としてのマナーやモラルは持っているか。
②先生になろうと思う熱意や努力があり、積極的に子どもに接しようと研鑽（けんさん）しているか。
③授業以外の放課後や休み時間の子どもへの接し方など、人柄が表れるシーンは最も大切な時間なのである。
④正確に裏表がなく、真摯に子どもと接することができるかどうか。
⑤先生としてのあなた自身の考えや大人としての深淵によって、どう子どもを導こうとしているか。
⑥まとめると、教育実習の目的は、現場で貴重な経験をすることであり、学生として何の準備もなく、課題や問題意識もなくて体験しても、実りは少ないのである。

このような問いに対してどれだけの学生が

「当事者意識」（自分ごと）としているのか。学生の日常の行動や「授業の振り返り」の考察から読み取れる。

以下、学生に当事者意識を持たせるために、採用試験や実習先訪問で園長からの指摘などを授業の中で取り入れていく。「現場と大学の乖離」を限りなく埋めるためである。

①　幼稚園採用試験

採用試験を受けたある学生に試験問題等を思い出してもらい、授業に取り入れた。

【試験内容】

①体操：ラジオ体操第一

・縄跳び「前 2 分、後ろ 1 分（練習時間あり）」

・マット運動「前転、2 連続前転、後転」

・鉄棒「前回り（足音を立てずに）、逆上がり（やり直しあり）」

②ピアノ：小曲、弾き語り・・・自分が選んだもの

③個人面接：「私の生い立ち」（5 分間）

④集団面接（面接官 8 人）

志望動機。〇〇園に就職して貢献できること。担任を持ったとしてどんな保育がしたいか。〇〇園の先生の印象２つと、保育者として自分に足りないこと。保育者として 1 年後どうありたいか。あなたにとって仕事とは。最近感謝されたこと。私のキャッチフレーズ子どもがクラスで騒いでいる時、どう注目を集めるか（手遊びを含めて実践）。最近のニュースで印象に残っているもの（コロナ以外で）。内定をもらった後に他の園から「給料を倍に出すから」と誘われたらどうするか。

②　学生に現場をイメージさせるために

保育園、幼稚園の現場での「朝の会」「帰りの会」から当事者意識の観点にする。

【朝の会】

・挨拶は丁寧にはっきりと行う。今日の日付、天気、自然などの話をする。話を聞かない子にはその子に応じた声のかけ方をして注意を向ける。出席確認用個人マークを見せながら、一人ひとりの名前を呼ぶ。１人ひとりの表現を十分に認める。ポーズをとらない子には返事を褒める。欠席の確認をする。

【帰りの会】

・遊びをいくつか用意し、みんなが揃うまで待てるようにする。全員そろったら手紙など配布物を配る。ピアノを弾く。絵本の読み語りはゆっくり丁寧に行う。絵本を持つ向きや角度などみんなが見えるように配慮する。前に出てくる子に対しては「みんなが見えないから座ろうね」と声をかける。今日の活動を振り返る。明日の登園が楽しみになるような話をする。帰りの挨拶は椅子の上に上がらずにするように伝える。

（２）実習先訪問等からみる学生の実態把握と学生理解

【実習】

実習生は、なかなか子どもたちの心をつかむことが難しい。日頃保育の中で行っている手遊びを担任に確認するか、もしくは、朝の活動前や遊びの時間に子どもたちにどのような手遊びがすきなのか、どのような遊びをしているのか質問しても良い。

・その様子をみてまずはいつも行っている手遊びから入り、実習生の得意とする手遊びや次に行う導入に入ると良い。

・指導案については、図書館で本を借りて、まずは「写す」ことからスタートしたい。出来なくて当り前であり、書きなれることが大切である。

・保育実習Ⅰで不十分なところを教育実習・保育実習Ⅱで活かすようにする。

・実習は、してあげているのではなく、させて頂いているという感謝の気持ちを忘れないようにしたい。

【声の大きさ】

・実習生として１年目の学生は、声がかれてしまう人が多いがなぜか。注目させるために、終始大声を出す必要はない。例えば、手遊びやリズム遊びをするなどの工夫が求められる。

・年中・年長さんになれば先生が前に立つときは、話をしないと約束事をすることや、小さな声で話し注目させる方法も工夫したい。

【保育園内での保育者と保護者】

・保護者に対しては、年下であっても必ず敬語で話すことが大切であり、保護者はどのようなことを知りたがっているのか、常に意図を読み取る姿勢が大切である。

【どこにいても先生】

・先生の悪口を子どもの前で言わないこと。

・保育者は、どこに行ってもみられている。どこに行っても先生であることを忘れずに行動すること。保護者は子どもの担任以外の先生も見ていることを忘れてはならない。

・ある保育者は「初めての保育参観では、前日なかなか眠れなかった。そして自分の正面に立っているお母さまが、腕組みをしていた。その姿をみたときは、びっくりするぐらいドキドキした。でもそのようなお母様に一番に関わらないといけないと思った。保護者からみて、１年目の先生はとても心配である。担任をかえることはできない。担任になった以上、子どもたちをしっかりと保育する事が重要である。」と話してくれた。

【就活と自主実習】

ある保育者は「今からいろいろな園へ実習に行くと思いますが、〇〇園は、日誌が多いらしいよ。先生が厳しいらしいよ。指導案がたくさんあるらしいよ。と噂をする人がいるかもしれません。私の学生の時も、そのように噂をする友達はいました。しかし、あえてそのような厳しい園に行ってみる私でした。人によって価値観は違います。自主実習は、就職してからはいくことはできません。今のうちにたくさん見学などして自分にあった園へ行ってみてください。そして子どもたちはもちろんのこと、先生方の動きもしっかりとみてきてください。最後に、来年の４月からは、みなさん『先生』と呼ばれる立場になります。１年目であっても１０年目であっても『先生』で年数には関係ないのです。いろんな家庭環境があり、個人差、性格の違いがあります。金子みすずさんの詩があるように『みんなちがってみんないい』のです。」とアドバイスしてくれた。

【子どもを平等にみることが大切】

子どもが喧嘩をしていても片方の意見だけを聞くだけでは喧嘩はおさまらない。両方の話に耳を傾けることが大切で、３６０度どこにでも目を向けておくことが大事である。

挨拶や掃除、返事、行動そのすべてが実習であり、就職してからも続きがあるのである。
欠点があっての人間です。出来ない事がある方が、子どもの気持ちにも寄り添えるのではないか。

【担任をするとは】

実習先訪問で関心があるのは、短大の卒業生でも１年目から担任を任されている光景に出会うたびに感激する。それでは、担任をするとはどういうことか。

４月～５月の連休前までに子どもの「実態把握」並びに「分析」ができるということである。生活面、遊び面など、１０の姿など、子どもを理解することからスタートする。それは、常に、園の方針、園の研修テーマにも関連しなければならないだろう。保護者対応も視野にいれなければならない。学生が実習中に保護者対応を学ぶ機会は少ないが、保育者になれば送迎時などはもちろん、担任は、学級懇談会等で、子どもの成長について、具体的に語れる実力を体得していかねばならないだろう。私たちは、つい「子どもに言って聞かせないと！」「もっと教えてやらないと！」という言い方を大人はしてしまいがちである。もちろん、「教える」ことも大事であるが、ただ、それを一方的に続けられると、子どものやる気は持続しません。指示待ちにもつながることを理解しておく。一方で、みなさんは、人に「話す」「書く」など、自分の内側にある考えや情報を外側に表現する「アウトプット」が子どもたちのやる気を生むことを実感している。例えば、小中学生に「今、説明したことを、もう一度、自分の言葉で、先生に説明してもらえるかな？」、大人（大学生）でも、一度インプットしたことをアウトプットすることはやってみると、けっこう大変な作業である。話を聞いてわかったつもりになっていることでも、いざ、自分で同じように説明しようとすると、本当に理解していないとなかなかできないものである。言葉に出して、自分で表現してみることは、知識を定着するうえでも効果的な作業であることを理解してきたことを確認したい。

実習後の学生の振り返りの考察は次の内容である。

ある学生は「私の一番の課題は『伝える力』です。前回の実習の設定保育で製作の手順を伝える時、子どもになかなか伝わらず、言い方をあれこれ変えてみても伝わらなかったという経

験をしました。反省会で先生に尋ねると、子どもにとって身近なものやイメージしやすいものを例に出して伝えると良いことを教えていただきました。例えば、踊りの振り付けで扇子を頭の上に広げるという部分を、先生は『雨に濡れないように傘をさしてね』と子どもに伝えており、子どもたちもすぐにイメージ通りの動きをしていました。この経験から、子どもの目線でどんな言葉を使って、どのような表現をしたら子どもにとって伝わりやすくイメージしやすいのかを考える力や表現力が私の課題だと感じました。同時に、手遊びや絵本で子どもを引き付ける力などの技術面や子ども同士のトラブルを、どちらにもモヤモヤを残さないように仲裁する力、子ども一人ひとりの発達や個性を見る力、視野を広くもって、今自分が何をなすべきかを素早く把握するなど、学びが必要である。」と授業の振り返りで考察している。

ある学生は「保育実習では、１歳、２歳、３歳のクラスに入り、それぞれ年齢への援助の仕方、保育者の声か等を中心に観察し、実習に取り組みました。教育実習では、子ども一人ひとりの性格、特徴を把握し、子どもに寄り添った声かけを意識しながら実習に取り組みました。今回の教育実習を終えて課題が何個かできました。①つ目は、部分指導で製作物をした時に１人ひとりに対しての声かけを意識しすぎてしまい、全体への声かけがあまりできなかった事。②つ目は、読み聞かせの時に緊張しすぎて手遊びが２～３個しか出てこなかったり、本の中の「ナレーター」と「セリフ」の区別が付きにくかった事。」③つ目は、ケンカしている子への対応に困ってしまった事。このことを踏まえて、まず１週間に３曲の手遊びと２冊の読み聞かせ練習を行いたいと思います。次に、自主実習等に行き、保育者の全体への呼びかけやケンカしている子への対応等、しっかり観察し、吸収したいと思います。」と授業の振り返りで考察している。

ある学生は「これからの私の課題は、子どもへの声掛けのレパートリーを増やす事だなと思います。この前の実習での部分指導で声掛けの大切さがとても分かりました。子どもに対して『大丈夫かな？』『出来そう！』というマイナスな声掛けをすると、子どもも不安になってしまって活動があまり進みませんでした。その反省を生かして、次の活動で、『上手だね』『やってみよう！』などの声かけをすると、子どもも自信をもてて、楽しく活動ができたなと思いました。声掛けやひとつで、こんなに子どもの姿が変わると驚いたので、子どもが嬉しくなるような、やりたいと思えるような言葉かけをもっと出来るようになりたいと思います。」と授業の振り返りで考察している。

②アクティブラーニング

オリエンテーションで「私の授業は、教壇を降りてみなさんと同じ目線に立ち、積極的に机間を移動し、学生と対話しながら授業を進めます。理論と実践をリンクさせながら問いかけ、意見を求め、解説を加えます。授業では、アットランダムに指名（適度な緊張感）し、「自然体」で発言を求めながら『アドリブ』力（とっさの質問や急なスピーチなどにも対応できる等）も強化し、グループワークの中で『司会力』も習得する『双方向授業』です。

合わせて『社会人基礎力』の視点からマナーや言葉遣いの指導、時事問題の解説も同時に行います。特に、基本的な『学習の構え』を重視し、礼儀作法、姿勢、返事、反応、表情、メリハリ、リズムなどをベースに討論の仕方等、授業のすべてで『リアルタイム』に学んでいきます。一つの方法として社会人学生のキャリアにも大いに学びましょう。」と伝える。

図２「声のものさし」

科目間連携を特に意識した授業を展開した。理論と保育現場のつながりを特に意識した。市販の視聴覚教材（動画）だけでなく、保育の場の体験活動の写真を丁寧に見てイメージを膨らませながら講義を展開する。保育者と保育実践のつながりを意識して、言葉を構築する。

図３「保育者とどもたちのいもほり」

４　研究の考察

教員、指導者、先輩などがフィードバックした場合でも、自分の問題（当事者意識）としてとらえられないと改善につながらない。園などに就職したら学生は完成しているわけではなく常に振り返りながら進まないといけない。就職できて働いているから完成した先生だというのはつまずきの要因になる。もちろん、ここからは大学教育の場から離れてしまった卒業生の自己責任となるが、卒業した後でも自分を振り返る力を持った人材を育てる教育が大切ではなかろうか。

５　まとめ

ある学生は「授業を通して、人前で話をする心構えや聞き手になった時のマナーを学んだ。最初の頃は１分間スピーチだけでも話したくなかったが、先生にアドバイスをいただき、話の構成を考えて話すように心がけて話すようにした。そしてなぜ話すことができないのかの原因や話す力を鍛える方法を授業等（あらゆる機会で」の中で知ることで、自分の中にあった話したくないという感情が和らいでいった。今では、友だちとの会話では自分から話しかけることができるようになった。また信愛祭での模擬授業の発表では司会進行を行った。やはり話すときは緊張するが、以前のように何も話さないで、会話が終了することはなくなった。また授業で急な指名でも答えられるようにもなった。そのためか周りの人から「変わったね」や「話して楽しくなった」という言葉をもらうようになった。

私は人と人とが関わりを持つには会話をすることが大切だということを学ぶことができた。保育現場では、子どもと保護者との間に築かれる信頼関係を形成するためにも会話は重要だ。そのためにも人とのコミュニケーションを大切にしていきたいと思う。」と授業の振り返りで考察している。

学生の振り返りの考察あるように、保育者になっても、まずは自分の現状ついて知ることを繰り返してほしい。自己覚知とは社会福祉の中で主に使われるが、関係の中で生きるすべての人に求められる姿勢であると考えている。よって、学生は、自分が見聞きしたこと、触れたこと、体験したことから感じる自分の受け止め方や反応の仕方で自己を認識する機会にしてほしい。

【参考文献】

（１）多田陽子・関谷みのぶ「『自ら学ぶ』ための短大２年間の連続した保育者養成―協同学習の視点からの考察―、教育保育研究第３号、２０１７ｐｐ５１－６１
（２）犬飼己紀子他「保育者として自己覚知の必要性～グループワーカーとしての保育者像～」上田女子短期大学紀要、
（３）全国保育士会研究紀要委員会「保育研究の考え方・すすめ方」
（４）佐藤浩章「大学教員のための授業方法とデザイン」玉川大学出版部、２０１０年
（５）梅田悟司「言葉にできるは武器になる」日本経済新聞社、２０１６年、ｐ４～ｐ６
（６）中谷素之「学ぶ意欲を育てる人間関係づくり」金子書房、２０１３年、ｐ２８
（７）多田孝志「共に創る　対話力」教育出版
（８）福澤一吉「新版　議論のレツン」ＮＨＫ出版新書
（９）宮原　哲「コミュニケーション最前線」松柏社、２００２
(10) 藤原和博「つなげる力」文春文庫
(11) 山本太平「トヨタの会議は３０分」すばる舎、２０２１年、ｐ１～ｐ４
(12) 杉江修治他「大学授業を活性化する方法」玉川大学出版部